

共に学ぶ人間の時間

佐相 憲一

一

高校時代は急に大人っぽくなる時期である。自分自身で選択する未来には希望もあるが、自我確立へのとまどいも尽きない。体つきも大人になり、個人的なものがはっきりしてくる。もちろん、小学生・中学生の頃と同じように友だちとはしゃいだり、おしゃべりしたりもあろう。しかし、すでに一人一人が人間存在の深淵の入口を見つめざるをえないところに立たされ、友人関係もそれまでよりももっと深い次元のものになっていくのだ。何を学び、どうしたいのかが大きく問われてくる。日本社会や世界・地球の視野で見ることすら求められ、現実に関心が社会に出ていくことを意識する。

恋愛などあらゆることで大人の領域が見えてくる。

多感な青春の輝きは常に孤独と隣合わせであり、そんな人間形成の大切な時期に、どんな教師と出会えるかはその人の人生に後々までかなり強い影響があるものだ。

高等学校という現場で、一九七四年春から二〇一二年夏の現在までずっと教師をしてきた人が、玉造修さんである。理科の先生で、化学と物理と生物を教えてきた。茨城県のいくつかの県立高校で教えてきて、この春、定年退職し、記念に生涯初めての詩集をこうして刊行するのだが、その後も再任用の高校教師として勤務しているのである。まさに「生涯一教師」だ。

二

私が玉造さんと出会ったのは、詩人会議の場であった。玉造さんはまだ詩を発表する前で、興

味をもって購入した「詩人会議」誌の読者であった。いろいろと対話交流する中で親しくなると、私は玉造さんに詩人会議の会員になりませんかとお誘いしたのだった。

対話の中で感銘を受けたのは、玉造さんが高校の理科の教師であるだけでなく、担任や副担任としてホームルームや道徳の時間に、高校生たちに詩の鑑賞授業を実践しているということだった。その時間は勉強モードを離れた感じで、玉造先生は自分が感銘を受けた現代の名詩をコピーしてきて高校生に配り、朗読して感想を出してもらったりするのだそうだ。「詩が好きになつてくれるかはなかなか分かりませんがねえ」と謙遜する先生であるが、人生の成長期にいる多感な高校生たちが詩というものに接することは、何と豊かな経験ではないだろうか。それも、教科書の受験勉強の間答とは別の次元で、先生と生徒が人間として共に詩を感じるということ。私はそれを聞いてこ

の教師を心から尊敬した。

それほど詩が好きなら、玉造さんも書いているのではとお聞きすると、わずかに赤面しながら、否定はしない玉造さんであった。

彼は小説も愛読していて、「民主文学」の準会員である。「詩人会議」もよく読んでいて、会員となつてからは自分が心を動かされた作品の作者に便りを送るなど積極的な批評姿勢である。小林多喜二や宮本百合子の研究会にも参加している。

若い人たちと日々接し、組合活動などを通して社会的な問題にも積極的に関わって行動してきたこういう人こそ、詩の場につどい続けてほしいものだ。日本の現代詩の傾向が専門化・非大衆化し過ぎて窒息しそうな気もする昨今、高校で理科を教えながら詩を愛して鑑賞し、自らも書き出した玉造さんのような存在が今後の詩の伝播には欠かせないと思う。かつて戦後詩にはサークル詩運動という貴重なものがあつた。民衆が詩を学び、生

活感溢れる実感を詩に書く運動は、いわゆる専門詩人たちをも刺激して、日本にも詩が身近な時代があったのだ。これからの二十一世紀、新しい形でそうした動きをつくっていけるとするならば、この茨城の高校教師が生徒たちに投げかけた行動などは一つのヒントになるのではなからうか。

そんな玉造修さんから、「詩集を出したいので編集してほしい。来年春の定年退職の記念で、これを機に詩の道に入りたい」という連絡をいただいたのは一年前だった。「指導してくれ」というのである。尊敬すべき人生のベテランに、詩の先輩面するのは嫌だと思ったが、指導なんておこがましいことではなくて、詩の友としてのアドヴァイスなら喜んでさせてもらいますよ、玉造さんが詩の世界に入るのには私にとっても大きな喜びだから、ということになった。

それから彼は、これまでの経験豊富な半生から次々と印象深い情景を書いていった。

三

昨年夏コールサックから刊行されたアンソロジー『命が危ない311人詩集―いま共にふみだすために―』に玉造さんが寄せてくれた作品「海底へ」を読んだ時、編者として私は驚いた。こんなことを言つては失礼かもしれないが、それまで見せてくれていたメモとは次元の違う、とてもいい詩だったからだ。「初心者」と謙遜する作者自身をこえて、ここに一人の詩人が誕生するのを目撃する感動があった。戦後社会をいっしょうめんめい生きてきた定年退職間近の一人の高校教師の人生の重みがあるから、詩を書く書き方さえ習得していけば、この人には書くべきことがたくさんあるんだ、と確信した。物事を視る眼がすっかりしている、それが何よりである。「海底へ」は今回の詩集に再録されている。全文引用しよう。第

二章の冒頭だ。

海底へ

物の重さがわかってからの
人類の歩みを高校生と共に
教えられたり
不遜にも教えたり

一九七四年春

日本全国の海岸線から採って来た
ほんの少しずつの砂粒のある地質標本室
その隣の化学教室で
第一步を踏み出した

物質の世界へ青少年を導いて
生活している自分
物質の歴史が平坦な道のりでなかったことは

知っているつもりだった
思いがついていた

原子力は必要性があると出世コースへ進む先
輩に
違う道を歩こうと言えなかった

恋人を炎の中から救おうとして
彼は焼け死んだ
結婚もしていない四十半ばの齢で
物質のもつエネルギーを知るため
夏休みのたびドイツへ出掛けていた
教えて欲しかった本当のこと

今 三陸の海で弓形状に日本列島を
支える岩盤が海底で激しく動いた
地球のもつエネルギーを賢治のように
あせらず あなどらず

この詩が表現しているものは深い。昨年二〇一一年の三・一一東日本大震災・福島原発事故は、化学・物理の教師である作者にとつて特に切実な悲しみであった。一九七四年に高校教師となるにあたって、大学時代、教師時代を通じて、作者はさまざまな研究家の卵と同じ時間を過ごしている。〈原子力は必要性があると出せコースへ進む先輩に／違う道を歩こうと言えなかった〉という思いは痛切だ。人によっては原発推進の方向へと進んでいった周囲だが、脱原発の立場の作者はいまこの事態に、反対の立場に行ってしまったかつての周囲の研究家のその後を思いやるのである。自分があの頃もっとしっかりと説得していれば、というこの思いは通り一遍でない人間関係の真実である。そして、作者は自らの方向に確信を強めながらも、〈物質の世界に青少年を導いて〉きた自分自身にも内省の眼を向ける。自分はちや

んと教えてきたのだろうかという問いかけが全篇に感じられて、その誠実な姿には少なくない読者が共感することだろう。驚くべきことに、このアンソロジー参加詩が玉造さんにとつて初めての印刷物発表詩である。長年書いてきた詩人たちも真つ青ではなからうか。この切実性、この多面的な回想と現実刻印、そして親しみやすい語り口。ぶっきらぼうなところをもっと丁寧に展開してくれたらもっといいのには感じるが、読み手に伝わる切実な詩である。終連の願いもいい。

四

こうして玉造さんの第一詩集『高校教師』は、定年退職と再任用のこの二〇一二年、親しみやすい内容と語り口で刊行となった。

詩集は三章に分かれている。第一章「高校教

師」は就職当初から今日までの教師の日々が生き生きと伝わる作品群である。理想に燃える志があり、ちよつとズッコケてもいて、親しみ深い素顔の先生の体験したものが現場から伝わってくる。冒頭の「岩井高校の夏服」には、教師の人間性が鮮明だ。

岩井高校の夏服

一九七四年
教員一年目

六月一日

女生徒は水色の夏服

世界知らずが教壇に立つて
化学を教えている

と教えてきたのだろうかという問いかけが全篇に感じられて、その誠実な姿には少なくない読者が共感することだろう。

驚くべきことに、このアンソロジー参加詩が玉

造さんにとつて初めての印刷物発表詩である。長年書いてきた詩人たちも真つ青ではなからうか。この切実性、この多面的な回想と現実刻印、そして親しみやすい語り口。ぶっきらぼうなところをもっと丁寧な展開してくれたらもっといいのには感じるが、読み手に伝わる切実な詩である。終連の願いもいい。

中間考査の問題作成

教科書 指導書 問題集 参考書

やさしい問題でいいんじゃないか

彼女たちは青い空

この制服を身につけて

それなのに

この制服を人に見られるのが嫌だと言った彼

女

別の高校へ進みたかった

そんなことどうだっていいんだ

岩高の

すばらしい仲間が君を待っている

この感覚よく分かるなあと、思わず自分の高校

時代を思い出ししてしまうほどだ。受験制度によって生徒たちは志望校に入れなかつたりする。制服は偏差値の象徴でもある。そういう葛藤の様子がリアルだ。〈青い空〉のさわやかな〈制服〉を着た女子学生の屈託を受けとめて、教育への情熱に燃える新人先生が願いをこめて励ましているのだ。ところが、この教師、次の作品「下宿の風呂場」では、教師仲間とスポーツをしていてうっかり火事寸前のドジを踏む。そこがまた人間臭くて共感を呼ぶところだ。

作品「みかんを一緒に」は恋の詩だ。若い教師はプライベートでは悩み多いウブな男だったのである。研究者となったこの女性と作者は信頼し合っていたようだ。〈玉造君とは恋愛をする気持ちになれない〉と言われてはせつないところだが、こういうシチュエーションは世代をこえてひろく共感されるだろう。飾り気のない回想に思わずクスツツと笑いながらも、とても新鮮である。

教師も一人の人間なら、生徒も固有の人格である。今度は作品「卒業」。作者が目撃したある女性教師とある男子生徒の実話が、男と女の悩ましさを刻んでいる。もっと詳しく読みたい気もするが、〈みんなそれぞれの出発だ〉という〈卒業〉は適度に謎に包まれている方がいいだろう。

事実は小説よりも奇なりと感じさせる「ズボンと娘さんと息子さん」では、こどもの頃、父親の恥ずかしいところをフォロワーしてくれた隣の集落の娘さんが、作者が勤務する高校の担当する男子生徒の母親として再登場するのだから愉快である。「パーマ屋さんへ」「ギター」「学校火災」といった作品群でも、教師の青春のひとコマひとコマが生き生きと描かれている。

高校教師は組合活動にも熱心であった。「組合活動ばかりしていると」では、先輩教師から〈組合活動ばかりしていると／校長になれなくなるぞ〉とギクリとさせられる。しかし、生徒たちを

愛する熱心な教師は人間らしい社会、人間らしい教育をモットーとしてひるまなかつた。帯文にも引用した「茨城高教組」の力強くさわやかな実感は、思わず「お疲れさま！」と声をかけたくなる社会ヒューマニズムに溢れている。

茨城高教組

今日は最後の大会

どれだけ支えてくれただろう
 どれだけ頼りにしただろう
 どれだけ聞いてもらっただろう
 どれだけ大切にしたらだろう

先輩

同輩

後輩

私はその一員となり得た

江戸崎から水戸へ夜の往復
 何でもなかつた

高校生のつどいや
 教育のつどいの準備
 県教委との交渉

生徒が人間らしく成長してほしい
 生徒と教師の人権を守ること
 先輩たちの最後は堂々としていた

私はひっそりと
 〈ありがとう〉

一人ぼっちだった
仲間にしてくれた
三十八年間

仲間がいるからこそ生きられる

そして、「化学教室で」で振り返る長年の教師生活、あくまでその眼は未来を生きる青年たちへの励ましのお眼だ。

五

第二章「共に社会に生きる人々」は、先ほど引用した「海底へ」で始まり、同じ理系の学問を積んだかつての仲間や知人たちが、それぞれの場の第一線でどうこの現実に向かっているかを思う詩群が続く。その中には作者とはかなり違う方向で出世した人も含まれて、青春の回想とその後の人

生の分かれ道が複雑な思いを伝えている。
「頼もしい青年が」「研究者」は原発に関することとで切実に書かれた。

「同業者」は大学仲間がその後作者と同じ教師になるが、作者とは違う私立のそれもアイドル歌手なども通う高校だという。「弁護士の青春時代」の友だちは弁護士になった。

「布川事件再審無罪の日」は、短い詩の多い作者にあつて意欲的な二部構成である。冤罪事件として有名な布川事件の地元で、無実の罪で捕まった二人はへ私より五つ年上への同じ高校出身だという作者が、行動を通して彼らの無実を確信し、裁判を支援していった歳月をリアルに描いている。「追憶」「青春」は、二人の作家の自伝的作品に寄せた共感の作品だ。

このように「共に社会に生きる人々」の身近で切実な刻印が続いた第二章の終わりは、原発問題に戻って、「東海村」だ。生まれも育ちも暮らしも

茨城という作者は、小学校五年生の時に春の遠足で同県東海村の原子力研究所を見たという。そして、大学時代には、そこにつながるような研究は自ら断っている。

日本には原発関係で儲けた人々もいれば、作者のように科学の人間性を意識して青年に伝える教師になった人もいる。作者が学生だった頃にはまだ幻想もあったこの国の科学のその後の行方を考える時、この章に書かれた玉造さんの複雑な思いは痛切だ。

六

第三章「ありがとう」は、教師が自らのこども時代に帰り、息子に帰り、孫に帰り、甥に帰り、夫になり、父親になり、それぞれの情景を感謝をこめて綴っている。

「君の家」の稔君、「浮島へ」の友や父や祖母、

「方程式はない」の伯父、「小野の逢善寺ほうぜんじ」の父母や近所の人たち、「後樂園」「竹提灯」の父、「にしんそば」の母、「函館にて」の息子、「花嫁の父」の娘、「京都で」の原田夫妻と妻、「それだけです」の暮れのサントリーホールの妻。
甘酸っぱい回想と、人生を共に生きるという感謝の人間観、それぞれに作者の個人的な思いでありながら、素朴に綴られた関係性の実感は、ひろく生活者たちに共感されるだろう。

七

教師は教えるだけじゃない、教えられもする。出会った人間は相互に教え教えられる。そして共に生きる。

そんな玉造さんの声が聴こえてきそうだ。

この冷たく厳しい時代社会で見失いがちな人間の心のぬくもり、連帯の声、出会いの不思議さ、

そういったものが伝わってくる。

玉造さんに、この作品群に出てくる人々のことをいろいろとお聞きした。その時、私が強く感じたのは、玉造さんが人間を信頼していて、仲間や家族を愛していることだった。

社会的政治的な問題では、庶民を苦しめる権力に容赦ない批判の声をあげ行動もする頼もしい高校教師が、詩の集まりでは実に謙虚で優しい眼差しで勉強家だということにも新鮮な共感を覚える。

理科というのは理科そのものを学ぶだけではなく、科学を学ぶ心のあり方を学ぶものでもあるという哲学が感じられる生き方だ。原発事故や軍事や環境破壊をはじめ、科学技術が暴走している今日、一人の高校教師の存在はとても大きい。

若者たちと詩を鑑賞する教師はついに自ら詩を書く道に入った。理科の先生がこんなに人間臭い心をつまんだ詩集を出したのだ。ここには飾らない生きた血が通っている。

この詩集を読むと、青春が懐かしく思えてくる。読者はこの詩集をきっかけに、それぞれの青春を回想するかもしれない。それはとても豊かな読書のひとときではないだろうか。

科学技術のあり方を考え直さなくてはならない今日、人間関係が希薄と言われるこの時代において、一九七〇年代、一九八〇年代、一九九〇年代、二〇〇〇年代、二〇一〇年代、と一貫して時代の卵たちと人間の心で接してきた高校教師の、また戦後から現代への激動をさまざまな人々と共に歩いてきた人の、この声は、いまを生きる広範な人々の心に響くに違いない。

玉造修詩集『高校教師』栞解説文
佐相 憲一

コールサック社

2012